

2017年4月9日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 24章 10～17節

説教：罪を犯したのは、この私です

あらすじ

サムエル記には、さながらイスラエルの歴史絵巻を見るように神がダビデをどのように取り扱っていったかが描かれています。その最後の章の所を開いています。普通であれば、イスラエル統一を成し遂げたダビデの業績をほめたたえて終わるところでしょう。ところが、これまでのダビデの業績を台無しにさせるような終わり方です。いったいここにどんな恵みがあるのか。先週に引き続き、見て参ります。

問題の発端は、ダビデがイスラエルの人口調査をしようとした所から始まります。今の時代なら、国の活動計画や予算を算出するために人口調査をします。ところが聖書においては、神の救いに与っている者を数えるのが調査の目的であると、はっきりと定められていました。もし罪ある者が何もせずに戸籍に登録されたならわざわざ民に及ぶので、調査するときは必ずひとりひとり罪のための贖い金を支払わなければならない、とさえ書かれていました。ところがダビデは、神が定めた手順を守らず無理矢理に調査を行わせてしまいます。部下のヨアブは疑問に思うのですが、ダビデに押し切られて九ヶ月と二十日をかけてイスラエル中を巡り、民を数えて戻り、ダビデに報告しました。9節です。「イスラエルには剣を使う兵士が八十万、ユダの兵士は五十万であった。」

ダビデが知りたかったのは、神の救いに入れられた者の人数ではありません。兵力でした。自分の力を誇りたかった。それが前回ま

でのあらすじです。

1 ダビデの告白

1) 大きな罪を犯しました

まず10節。「ダビデは、民を数えて後、良心のとがめを感じた。そこで、ダビデは主に言った。『私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私は本当に愚かなことをしました。』」

ダビデはさすがに自分のしたことで心がうずいたようです。信仰者であるダビデは、すぐに罪の告白をいたします。第一ヨハネ1章9節にもこのようなみことばがあります。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

ふり返ればあのバテシェバ事件のときもそうでした。姦淫の罪を犯し、ウリヤを殺しました。ずっとその罪を隠していました。預言者ナタンに責められてやっと、「私は主に対して罪を犯した」と告白しました。産まれてきた子どもが死ぬという苦しみは通されましたが、罪は赦されました。そのような経験をしています。今回は少なくとも人を殺していません。この罪の告白によって罪は赦されるだろう。そんなふうに予想していました。

2) 主の手に陥ることにしましょう

ところが事態は思わぬ方向に向かっています。神は、預言者ガドを通してダビデに

語ります。七年間のききん。三ヶ月間ダビデの仇に追われること。三日間、国中に疫病が下される。この三つの中から一つを選べと言うのです。ダビデは罪の告白をしたので、赦されたはずだとすっかり安心していました。ですから次の朝、まさかこれほどの厳しいことが主から返ってくるとは予想していません。ダビデは14節で、「それは私には非常につらいことです」と言って本音を漏らしています。

それでダビデはどれを選択したのか。14節後半。「主の手に陥ることにしましょう。主のあわれみは深いからです。人の手には陥りたくありません。」不思議なことに、ダビデが三つの中からどれを選んだかは触れていません。その代わりに、主の手に陥ることにしますとだけ語ります。どれを選んでもつらいので、自分では選べない。主におまかせします。そのようなダビデの返事です。そのときダビデは、「主はあわれみ深いから」と言っています。信仰深いようにみえますが、私にはそうは思えません。ダビデはまだ楽観的なのです。間違った動機で人口調査をしたくらいでまさか人が死ぬようなことまではしないだろう。自分は、きちんと罪の告白をしたはずだ。あわれみ深い神は、きっとさばきを軽くしてくださるだろう。そんなふうな予想をしています。この時点においても、ダビデにはどこか大丈夫だという安心感があって、どこか緊張感が欠けているようなのです。

2 神のさばき

1) 抜き身の剣を持つ主の御使い

ところがそんな楽観的な予想はこなごなに吹き飛ばされてしまいます。疫病で七万人

が次々と倒れていきます。それも一部の地域ではない。国中のあらゆるところで同時に発生しました。

第一歴代誌21章16節にこの時の様子が詳しく描かれています。「ダビデは、目を上げたとき、主の使いが、抜き身の剣を手に持ちそれをエルサレムの上に差し伸べて、地と天の間に立っているのを見た。ダビデと長老たちは、荒布で身をおおい、ひれ伏した。」

主の使いが抜き身の剣を持って現れる場面は、聖書の中では民数記とヨシュア記とこの第一歴代誌の三度出てきます。その中で、イスラエルにわざわいをもたらすのはここだけです。ですからここは非常に特別な場面と言っているでしょう。

あまりの恐ろしさにダビデと側近の者たちは荒布をまとってひれ伏します。ひれ伏しながらダビデは考えます。まさか主がここまで厳しいさばきをなさるとは思ってもいなかった。罪を告白したのに、どうして主はこんな厳しいことをなさるのか。それも自分がさばかれるのなら納得もしたでしょう。ところが、自分とは関係のない民たちが倒れていくのです。

2) 罪を犯したのは、この私です

ダビデは若いときに羊飼いで働いていました。囲いの中に獣が入って来たらただちに走って行って獣を倒し、羊を守りました。えさは十分か。水は飲んでるか。病気の羊はいないか。けがはしていないか。そんなふうに常に気を配ります。それが羊飼いの役割だと心得ていました。だから、他の家の羊が弱っていたり、獣に襲われているのを見たら、他人事とは思えない。あそこの羊飼いは何をしているのか、怠けているのかと、腹を立て

ることもあったでしょう。そんなダビデがやがてイスラエルの王となると、自分の役割は羊飼いとよく似ていることに気がついていました。イスラエルの王は、群れの羊を守るために立てられている。それが自分の使命であることを自覚していきます。

ところが今、何が起きているか。羊を守られなければならないはずなのに、自分の罪によって羊が倒れていきます。絶対にあつてはならないことが起きてしまいました。そのとき、ダビデは思わずこう叫びます。17節。「罪を犯したのは、この私です。私が悪いことをしたのです。この羊の群れがいったいなにをしたというのでしょうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」

3 イエス・キリスト

1) まことにわが家は、このように神とともにある。(23章5節)

24章1節を見ると、ダビデが人口調査をしようとしたのは、主の働きがあったと書かれています。その結果なんの関係もない七万人が倒れる。どう考えても理不尽な話です。わからないことがまだあります。ダビデは罪の告白をしました。それなのに、なぜダビデの罪は赦されなかったのか。そのことも大きな疑問です。もし罪の告白をしても神は赦さないというのであるなら、私たちは教会に来ることはできなくなります。そうなれば深刻な問題になります。

こう考えたらどうでしょうか。主はダビデをとおして主イエス・キリストのみわざについて教えようとしているのではないのでしょうか。そのことを理解するために一つの鍵となることばに注目したいと思います。ダビデ自身が語っています。「私と私の一家」がそ

れです。その自分の家のことを、彼はかつてこう言っていました。23章5節です。「まことにわが家は、このように神とともにある。」イスラエルを義をもって治める王であるなら、その家は神とともにある。ダビデはそう告白していました。日本でも、家を守る神という考え方がありますが、それと似ているかもしれませんが、神がおられるのだからわざわざ会いに会うことはない。ダビデはそう思っていました。神はあわれみ深い方であることを何度も経験してきましたからなおさらです。

2) イエス・キリストのみわざを告げるダビデ

ところが、ダビデは今こう叫びます。「どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」

ダビデの家には神がともにおられます。神がおられるのでわざわざ会いに会わない、のではない。ダビデの家はわざわざ会いに会わなければならない。それが神がおられるという本当の意味だったのです。そのことをダビデは、叫びながら学んでいきます。

なぜダビデの家はわざわざ会いに会わなければならないのでしょうか。ダビデが告白しています。「この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。」

神は、私たちをまるで羊であるかのようにご覧になっています。罪に苦しんでいる羊です。苦しみに襲われて弱り果てている羊です。なぜ羊は苦しむのか。聖書によれば、アダムが罪を私たちに受け継がれてしまっているからだと言います。言い逃れはできません。羊は、罪のさばきを受けなければなりません。

でも、主はダビデに叫ばせます。「この羊の群れがいったい何をしたというのでしょ

う。」罪を犯したのは羊ではない。この私です。自分に責任がある。自分こそ神のさばきを受けなければならない者である、とイスラエルの王に叫ばせるのです。

このダビデの叫びはどうなったのでしょうか。ダビデの末としてやがて救い主が来られました。この方は十字架の上で叫んでくださいます。「罪を犯したのは、このわたしです。わたしが悪いことをしたのです。どうか、あなたの御手を、わたしに下してください。」

もちろん主が罪を犯すはずはありません。私たちの罪を背負いながら、「罪を犯したのはわたしです」と代わりに言ってくださるのです。イスラエルの羊を救うために、このように罪ある者となられるのです。そのようにして、主のさばきの御手を、わざわいを下す主の御手を、この方は十字架の上でお受けになりました。だから私たちは罪を告白できるのです。そこで罪が赦されます。その代わりにダビデとダビデの一家はさばきを受けます。そのような流れになります。

なぜ主はダビデを動かして人口調査をさせたのか。すべてはわかりません。けれども一つのことだけは言えます。ダビデの口から、主の救いを語らせるためにこのようなことをされた。すべて私たちを罪から救い、死のわざわいから守るための主のご計画であった。

そのようにしてくださった主の御名をあげます。